

考えを言っているだけのように見える。しかし二つのことに注意すべきだ。

一つは、いま見たように、^⑥科学の基本方法は哲学の方法がその土台となっている、ということ。もう一つは、哲学の考え方は結局人によってバラバラのものだ、とは言えず、歴史の大きな流れの中でこれを見ると、少しずつではあるが必ず不可逆的な仕方^⑦で原理が前進している、ということである。

まず、はじめのことについて説明しよう。現在われわれは、科学は客観世界があるがままに捉える方法で、哲学は人間の生き方の意味や問題を考えるので客観的方法ではない、と考えがちだ。しかしこれはちよつとした誤解である。

たとえば、われわれは現在、電気というものを「プラス電気とマイナス電気」とか「電圧、電流、抵抗」といった言葉で捉えている。ところでこれは電気というものの何らかの実体に名前を付けたものではない。電気は複雑な現象なのだが、「プラスとマイナス」とか「電流・電圧」は、この現象を適切に説明するための「キーワード」「概念」であり、この「概念」を組み合わせることによって、雷神とか、ツール神とかいった神話的な説明ではなく、より広範な人々が共通に納得するような説明の体系が可能になった、ということなのである。

昔は人々は、自然の複雑で多様な現象をほとんどの場合自然神的な「物語」で理解していた。だがこの物語は文化によって多様で、統一性をもたない。そこで、物語のかわりに「概念」と「原理」(キーワード)だけを使って自然現象を説明しようとして現れたのが、自然哲学だったのだ。このことで、複雑な自然現象は、より、広範な共通理解を得るよう

になる。このように自然科学の方法は、そもそも自然哲学の方法原理をそのまま高度化し、精緻(極めて詳しく細かいこと)にしたものにはかならないのだ。

^⑧このことはまた、次のようなことを教える。われわれは一般的に、自然科学を客観科学、つまり世界を「あるがままに」捉える学問だと考えているが、ここにも大きな誤解がある。哲学と科学は、物語を使わずに「概念」と「原理」を使って世界を説明するが、このことで世界のあるがままの客観、つまり「真理」が把握されるのではない。じつはむしろただ、誰もが納得できる幅広い説明方式が得られる、というにすぎない。^{*}「普遍的なもの」とは、誰でもが共有できる世界の理解の仕方ということであつて、「絶対的な真理」ではないのである。

科学の知見(見聞して得た知識)は、一見絶対的なものに見えても少しずつ進歩する。必要がある場合、新しい現象が現れた場合はいつでも訂正可能なものなのだが、^⑨そのことは、「概念」と「原理」を使う説明原理であることで可能になっているのだ。

要するに、科学も哲学も、「絶対的な真理」を捉えるものではなく、「普遍的な理解」をより深く広範なものにしていくための思考方法なのである。

語注 森羅万象……樹木が限りなく茂り並ぶ(森羅)ように、あらゆる現象、宇宙に存在する一切のもの(万物)や事象。

客観……特定の認識作用や関心を超えた一般的なないし普遍的なもの。主観から独立して存在するもの。

普遍的……広く行き渡るさま。極めて多くの物事にあてはまるさま。

問一 傍線部①『世界』説明の方法』について述べたものとして適切